

令和 2 年 6 月 8 日現在

機関番号：22501
 研究種目：基盤研究(C)（一般）
 研究期間：2017～2019
 課題番号：17K12300
 研究課題名（和文）産後ケアシステムにおける看護専門職と育児支援人材のコラボレーションモデルの開発

研究課題名（英文）Development of a collaboration model of nurses and child care supporters in postpartum care system

研究代表者
 石井 邦子（KUNIKO, ISHII）
 千葉県立保健医療大学・健康科学部・教授

研究者番号：70247302
 交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,500,000円

研究成果の概要（和文）：効果的で汎用性の高い産後ケアの提供に向けた看護専門職と育児支援人材によるコラボレーションモデルの開発を目的とした。育児支援人材は、家事や育児の代行とアドバイス、誰にも言えない心情の傾聴等のケアを提供し、心身の不調を専門職につなぐ手段を持っていなかった。利用者は、育児支援人材による家事育児の支援と気兼ねなく話せる関係性に満足し、看護専門職による専門的支援を求めている。以上より、家事育児や家族関係に関する支援を育児支援人材が、母子と家族の健康問題に関する専門的支援を看護専門職がいない、双方向性の情報共有とケア計画・実施結果・評価の共有が継続的に行える仕組みが必要であることが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、十分に解明されていなかった我が国の育児支援人材が行う産後ケアの実態と、それが看護専門職の提供するケアと本質的に異なることを実証した。同時に、両者が連携する仕組みが未構築であるという課題も明示された。超少子社会に歯止めをかけるべく産後ケアの質的・量的拡充に向け、育児支援人材がより一層活躍し、子育てにやさしい街づくりの実現に役立てることができる。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to develop a collaborative model with nurses and doulas to provide effective and versatile postnatal care. Doulas provided housekeeping and childcare agency and advice, care for unseen emotional listening, and had no means of connecting physical and mental disorders to nurses. Mothers were satisfied with doula's support for housekeeping and childcare and the relationship with which they could talk without hesitation, and sought professional support from nurses. The effective model is in which doulas assist with housekeeping, childcare and family relationships, and nurses provide professional assistance with regard to health issues for mothers and children. It is necessary to have the system that allows interactive information sharing and continuous sharing of care plans, implementation results, and evaluations.

研究分野：母性看護学

キーワード：産後ケア 育児支援 ドウラ 連携協働

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

(1) 出産の高齢化、核家族化、地域のきずなの脆弱化が進む我が国において、母親の孤立が産後うつや児童虐待の温床となると危惧されていた。切れ目ない子育て支援を実現するために「産後ケア事業」が始まったものの、利用できる地域が限られ、費用が高額であるため、誰もが利用できる制度ではないのが現状であった。

(2) 産後ケアの主な担い手である助産師に加え、産後ケアのための特別な教育を受けた医療専門職以外の様々な人材が産後ケアに参画するようになった。しかし、非専門職の育児支援人材がどのような能力を有し、どのような産後ケアを提供しているのかは、明らかになっていなかった。

(3) 研究班の先行研究において、産後ドゥーラと助産師の協働によるデイケア型産後ケアが、育児不安の軽減、うつ傾向の軽減、母子愛着の増加をもたらし、「頼れる場所がある安心感」「自分の育児を見守る人がいる安寧」「自分が誰かに癒される幸福感」「母親役割代行によるニーズの充足」「育児に関する専門的支援」「母親同士の交流・つながり」「心身のリフレッシュと育児意欲の回復」を提供していることが明らかになった。

2. 研究の目的

(1) 産後ケア提供者が考える「育児支援人材が提供する産後ケア」の要素を抽出する。

(2) 産後ケア利用者が考える「育児支援人材が提供する産後ケア」の要素を抽出する。

(3) 効果的かつ汎用性が高い産後ケアを提供するための「看護専門職 - 育児支援人材コラボレーションモデル」を開発する。

3. 研究の方法

(1) 国内外における医療専門職以外の人材による産後ケア提供に関する文献検討：国内外の産後ケアに関する文献のうち、看護職、医師等の医療専門職以外が参画する産後ケア提供に関する文献から、ケア提供者の属性、研修の有無と内容、ケア提供の場・時期・頻度・内容、ケア提供の評価に関する記述を抽出し、類別した。

(2) 産後ケア提供者が考える育児支援人材が提供する産後ケア要素の抽出：産後ケアに従事している18名の育児支援人材を対象に、半構成的面接を実施した。調査項目は、現在行っている産後ケアについて(場所・頻度・内容・自己評価)、利用者の背景・特徴・ニーズ、産後ケアのための研修・教育、自己研鑽、今後の産後ケアに対する考え、医療専門職との連携、等であった。

(3) 産後ケア利用者が求める育児支援人材が提供する産後ケア要素の抽出：育児支援人材による産後ケアの利用者11名に、半構成的面接を実施した。調査内容は、産後ケアを利用した理由、産後ケアの場・時期・頻度、産後ケアの内容、産後ケアに対する満足度と評価、産後ケアに関する意見・要望等であった。

(4) 「看護専門職 - 育児支援人材コラボレーションモデル」の開発：(2)と(3)を統合し、「看護専門職 - 育児支援人材コラボレーション」による産後ケアモデル試案を作成し、育児支援人材と看護専門職からの意見聴取を行った。

4. 研究成果

(1) 国内外における医療専門職以外の人材による産後ケア提供に関する文献検討：国内において行政的支援に基づく先駆的な産後ケアの実際が報告されているものの、医療専門職以外の人材に言及したものは少数であった。海外では、産後ドゥーラと呼ばれる非医療専門職が、電話やインターネットを活用しながら、安価で広域にわたる支援を担い、ハイリスクの母親や家族における産後うつ予防、母乳育児確立、母子愛着強化、夫婦関係構築に対する効果が実証されていた。

(2) 産後ケア提供者が考える育児支援人材が提供する産後ケア要素の抽出：実施している産後ケアは、家庭訪問、医療施設や公共・民間施設を拠点とした活動と多岐にわたっていた。頻度と内容は利用者の個性や時期によって異なっていた。提供する支援は、食事や掃除などの家事代行とアドバイス、育児に関する悩みの傾聴と情報提供、身体的心理的リラクセスをもたらす直接的ケア、地域住民や地域ネットワークへの誘導、専門的支援への接続であった。利用者の居住地や年代は多岐にわたっており、家族等の支援者がいない、産後の心身の回復が順調でない、就業等の社会活動と両立に困難をきたしている、等の問題を抱えていた。育児支援人材による産後ケアを希望する者は多いものの、経済的理由から活用に制限があった。育児支援人材は、産後ケアに関連する資格を取得する等の自己研鑽を自発的に継続していた。活動以前の個人的経験を活かし、独自の支援方法を提示して利用者が自分に合った支援を選べるようにしていた。育児支援人材は、不安、焦り、パニック、怒り、不平不満、マイナス思考、神経過敏、孤独といっ

た、追い込まれ揺れ動く母親の心理状態を敏感に察知し、「子どもがかわいいと思えない」「子どもと一緒にいるのが苦痛」といった、誰にも言えない心情の吐露を受け止めていた。同時に、精神的不調を察知したときに、自分では対応しきれない、専門家につなぐ術がないというジレンマを抱えていた。産後ケアをより多くの人に長期間にわたり提供できないことがジレンマであり、自分自身のスキルの向上と、社会制度や利用者の認識の変化を熱望していた。今後の産後ケアにおいては、医療専門職や行政職との長期的連携の必要性が提示された。医療機関に所属する者、特定の医療専門職と個人的ネットワークがある者以外は、保健医療との連携する手段を持っていなかった。医師、助産師、保健師、行政との間で、常時情報を共有し、適時に相談ができる仕組みが求められていた。

(3) 産後ケア利用者が求める育児支援人材が提供する産後ケア要素の抽出：産後ケア利用者は経産婦が多く、長子の育児との両立が困難である、親が高齢である、自分や子どもの体調不良がきっかけである者が多かった。産後ケアの場所は、経産婦では自宅が多く、利用頻度は時期によって異なり、1年以上にわたり利用する者もいた。産後ケアの内容は、家事代行に類するものと相談相手・話し相手という内容に分かれた。産後ケアに対する満足度は高く、特に、家事や育児のアドバイスがもらえること、誰にも話せないことを気兼ねなく話せること、自分を認め決して否定しないことに対する満足度が高かった。看護職が提供する産後ケアの利用者はいなかったが、看護職には自分や子どもの健康状態の正常異常の見極めに関する専門的助言を求めると考えるものが多かった。育児支援人材が提供する産後ケアに関しては、多くの人に知ってほしい、もっと安価にしてほしい、との要望が多かった。看護専門職が提供する産後ケアについては、育児支援人材とは異なる専門的な支援をより手軽に提供してほしいという意見があった。

(4) 「看護専門職 - 育児支援人材コラボレーションモデル」の開発：家庭における育児生活に関する支援を育児支援人材が、母子と家族の健康問題に関する専門的支援を看護専門職が主に担当する、両者の守備範囲を共通認識したうえで双方向性の情報共有を行い、ケア計画とケアへの反応、ケアの評価を共有したうえで継続的にかかわることの必要性が明示された。しかし、同じ保健医療機関に所属する立場でない場合は、それが大きな障壁であることも明らかになった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

| | 氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号) | 所属研究機関・部局・職 (機関番号) | 備考 |
|-------|--|---|----|
| 研究分担者 | 川城 由紀子 (KAWASHIRO YUKIKO) (20337108) | 千葉県立保健医療大学・健康科学部・准教授 (22501) | |
| 研究分担者 | 北川 良子 (KITAGAWA RYOKO) (80555342) | 千葉県立保健医療大学・健康科学部・准教授 (22501) | |
| 研究分担者 | 川村 紀子 (KAWAMURA NORIKO) (90624809) | 千葉県立保健医療大学・健康科学部・講師 (22501) | |
| 研究分担者 | 杉本 亜矢子 (SUGIMOTO AYAKO) (90814062) | 千葉県立保健医療大学・健康科学部・助教 (22501) | |